3595-6920　email t-hatsu@tokyo-np.co.jp

T発

食で旅する世界

東京の各国料理紹介サイト10年

料理講習、文化も紹介

移民国家でもない島国の首都・東京で、世界約七十カ国の料理が味わえる。考えてみれば、不思議な話かもしれない。その魅力のとりこになった青木ゆり子さん＝港区＝が、東京の各国料理店などを紹介するサイト「e—food」を開設して今年で十年。食を入り口に、文化に触れるプロジェクトも始めている。

上マトンのひき肉に卵や玉ネギを入れて肉団子に
下さまざまなスパイスが並ぶ

シャラビィ・マゲドさん（右端）の料理に見入る参加者たち。左から2人目は青木さん＝世田谷区三軒茶屋で

先月、三軒茶屋で開かれた「東京アラウンドザワールド・プロジェクト」（TAP）の三回目はエジプト編。四谷のレストラン「エル・サラーヤ」のシェフ、シャラビィ・マゲドさんが講師となり、四品を参加者約三十人と一緒に作った。

その中の一つ、コシャリは米や豆、マカロニ、スパゲティを交ぜてトマトソースで和える庶民料理。「エジプトのコシャリの店は、日本のラーメン屋さんみたいなもの。安くて早くておなかいっぱい。高くても百円もいかない」。マゲドさんが説明する。

参加者は、ベリーダンスを習っていて中東にも興味を持ったという女性や、首都圏で開かれる世界の料理イベントを巡る〝イベントハンター〟の男性などさまざまだ。

食べ歩きが出発点

青木さんは十五年以上前から、首都圏の各国料理店を食べ歩いている。サイトは二〇〇〇年三月に開設。「趣味でやっていたら、広告収入が入るようになった」ため、〇六年には株式会社「イーフード」をつくった。

TAPは、中東の文化を紹介する活動をしているグループ「カフェバグダッド」と一緒に開催している。料理だけではなく、トークショーや演奏会など文化に触れる機会も設けているのが特徴だ。同会の水野香里さん（三三）は「これまで私たちのイベントに参加してくれるのは中東にかかわりがある人ばかりだったが、食ということでそれ以外の人にも間口が広がった」と話す。

好奇心に支えられ

二千軒近い各国料理店がひしめく東京には「混沌とした面白さがある」と青木さんはいう。タイ料理だったり、スペインのバル（つまみや酒を気軽に楽しむ店）だったり、突然ブームが始まる。「江戸の参勤交代の時代からいろんな人が集まり、多様性の土壌があることで、食の好奇心も強いのかも」と推測する。

一方、流行にとらわれず、料理や文化を知ってほしいとの思いも強い。世界各地を取り上げるTAPを中東から始めたのは「今まで日の目を浴びることが少なかった」との理由からだ。次回は三十一日に、ドキュメンタリーを観賞しながらパレスチナ料理を体験する会を埼玉県川口市で予定している。申し込みは「e—food」のホームページから。

料理ができあがると、一斉に写真撮影

トークショーで文化も紹介

文と写真・早川由紀美／紙面構成・国立孝雄

わが街わが友

台
台
名
エ
は
座
東

若葉町の母の実家には祖母と叔父夫婦と、その娘がい

運勢　6日（友引）

ね年　万歳笑い来って福の玉を置きてゆく夢を見る。腹の中にある本

氷山

氷山の上

翌日の朝食の後、
るところへアイリー
「何してるの?」
「ライ麦パンの仕
「いつ食べられる
「今日の昼食だよ
からね」と粉を練っ
ながら答えた。
「お米と違って
イリーンは言う。
そうか、彼女は中
時からお米の食文化
少女時代って言って
「そうなんだよ。
し、イーストで発酵
「何よりも窯が要
米とは違う」
「だからパン屋
「チャールズ・ベ
屋さんだよ。ベイカ

「今度ここに呼
「やめたら。あの
ンにはなりそうにな
陳さんがにこに
「少年、大事な